

日蓮大聖人御書全集

つちろうごしよ

土籠御書

新版  
1639

# 土籠御書

ぶんえい ねん ぶんえい ねん  
文永 8 年 (71) 10 月 9 日 50 歳 日朗  
がっ ちち さい ちちろう

にちれん あす さどのくに 罷 こんや 寒  
日蓮は、明日、佐渡国へまかるなり。今夜のさむきにつ

籠 有 様 おも 労  
けても、ろうのうちのありさま思いやられて、いたわしく

そうら との ほけきよういちぶ しきしんにほうとも  
こそ候え。あわれ、殿は法華経一部を色心二法共にあそば

おんみ ふぼろくしん いつさいしゆじよう 助 たも  
したる御身なれば、父母六親、一切衆生をもたすけ給うべ

おんみ ほけきよう よにん 読 そうろう くち 言 葉  
き御身なり。法華経を余人のよみ候は、口ばかりことばば

読 こころ こころ み  
かりはよめども心はよまず。心はよめども身によまず。

しきしんにほうとも たつと そうら てん もろもろ  
色心二法共にあそばされたるこそ貴く候え。「天の諸の

どうじ

きゆうし

とうじよう

くわ

どく

がい

童子は、もつて給使をなさん。刀杖も加えず、毒も害する

あた

と

そうら

べつ

こと能わじ」と説かれて候えば、別のことはあるべからず。

ろう

い

たま

そうら

疾

来

たま

み

籠をばし出でさせ給い候わば、とくとくきたり給え。見

み

きようきようきんげん

たてまつり、見えたてまつらん。

恐々謹言。

ぶんえいはちねんかのとひつじじゆうがつここのか

にちれん

かおう

文永八年辛未十月九日

日蓮

花押

ちくごどの

筑後殿